傾向と対策

	傾向と対策			受験対策
	出題数	出題傾向	難易度	
英語	推薦入試は、試験時間40分に対して、写真問題5問、会話問題5問、英文空所補充問題10問、語彙・文法問題20問の合計40問となっている。 一般入試は、試験時間50分に対して、英文読解問題10問（2つの英文についてそれぞれ5問ずつ）、英文空所補充問題10問、語彙・文法問題20問の合計40問である。	推薦入試における写真問題はある場面を適切な語彙と表現で説明できるかどうかをみる問題、会話問題は日常的な場面における英語のコミュニケーション力を問う問題である。 推薦入試、一般入試の両方に出されている空所補充問題では、文法力、語彙力、読解力が総合的に求められる。また語彙・文法問題は基本的な文法事項や慣用句・語彙についての知識を問うものである。 一般入試の読解問題は、社会や生活に関する話題を扱った2種類の英文（200～250字程度）について、文章の意味を正しく理解し文脈に沿った内容把握ができているかを確認する問題である。また、内容を正確に読み取れているかを確認する記述式の問題が1題出題される。	推薦入試、一般入試ともに標準的なレベルである。中学・高校の「英語」で学ぶ範囲の語彙、慣用表現、文法事項がきちんと身についていれば答えられるものとなっている。	●写真問題、会話問題 基本的な語彙や表現、日常会話における慣用的な表現を、具体的な状況に結び付けて身につけておくことが大切である。 ●空所補充問題、読解問題 英語の文法力・語彙力と共に、まとまった文章を文脈に沿って理解する力が求められる。文法に従って一文一文丁寧に読み、内容を正確に把握することが必要である。同時に、知らない単語や理解できない文にぶつかった時には、その箇所に執着せずに文章全体を読み通し、文脈から部分もしくは全体の意味を推量することも大事である。こうした作業によって、パラグラフ（段落）ごとに情報・内容を押え、全体の主旨を把握する練習を重ねることが大切である。 ●語彙・文法問題 中学・高校で学んだ文法事項を復習することが大切である。文法では、特に時制、仮定法、分詞構文は必ずと言っていいほど出題されているので、きちんと復習しておこう。
国語	推薦入試、一般入試ともに、現代文の大問1題と、国語の基礎知識に関する小問の集合が1題。	現代文は、評論、随筆、小説のいずれかが出題されている。ジャンルを問わず、内容理解や文脈把握を中心に、語意、接続詞や副詞などの使い方、文章の構成や展開に関する設問もある。一般入試で出題される文章は、推薦入試に比べて分量が多いが、出題傾向は推薦入試と同様である。 国語の基礎知識に関する問題は、推薦入試で15問程度、一般入試で20問程度出題される。同音異義語や同訓異字、類義語や対義語、四字熟語、語意、慣用表現などに関する基礎知識が問われる。 大部分は符号を選択する形式であるが、推薦入試、一般入試ともに現代文の大問で記述式問題（2問程度）が出題される。	推薦入試、一般入試ともに、標準的なレベルである。 現代文は、高等学校の教科書に掲載されている程度の文章なので、前後の記述に注意しつつ最後まで丁寧に読んでいけば、設問に解答できる。一般入試ではかなり長い文章も出題されているが、難解なものではない。 国語の基礎知識に関する問題も、日常でよく用いられる語について問われる。	●現代文の大問 様々な文章を読み、文脈に即して内容を理解する練習をしておくとよい。評論なら筆者の主張、随筆なら筆者の意見や感想を読み取り、小説は登場人物の心情変化をつかむことが大切である。 ●国語の基礎知識に関する問題 普段から参考書や問題集等で、漢字の読み、同音異義語や同訓異字、類義語や対義語、四字熟語などを勉強しておくとよい。語意や慣用表現は辞書的な意味を押さえることはもちろん、文脈で意味を判断できるようにしておこう。